

行間を読む

空間の関係性の認識によるつながり

指導教員 吉松秀樹教授 印

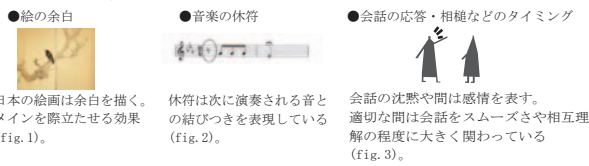
9AEB2210 山田 佳奈

1. 「行間を読む」は「間」を意識している

小説を読み進める中で自然と行間を読み、実際には文字として表現されていない真意を読み取っていることに興味を抱いた。

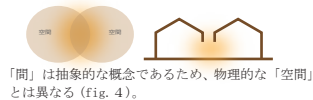
「間」とは抽象的な概念であり、日本の思想からはそこに何かがあると感じさせる。

人・文字・絵・言葉・音など、モノがあるからこそ存在するものである (fig.1)(fig.2)(fig.3)。



2. 間＝関係性

「間」は、明確な境界により区切られた空間として存在するものではなく、空間同士 (内外・部屋同士) の関係性である (fig. 4)。



3. 空間の関係性

街は公共の場であり、それぞれの空間が独立性を持つための方法によって、多様な関係性が生まれている (fig.5)(fig.6)(fig.7)。



5. L型壁を用いた関係性

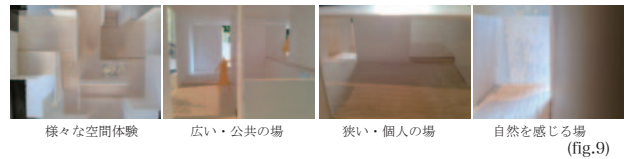
空間と空間を区切るモノである壁に着目する。街の様々な空間の関係性をL型の壁によって生み出す。様々な関係性は程よい距離感を保てる状態を作り、つながりと独立性が同時に存在することで、人は居心地よく感じる。



今までの住宅は壁に開けられた窓と扉により内部の空間同士や内部と外部をつなげていたが、L型壁の組み合わせによってできた隙間を開口部とすることで多様な関係性が生まれる。

6. 行間を読む住宅

「行間を読む」とは「間」の一部であり、ストーリーの流れから読み取る「間」である。まず、小説のようにストーリー性のある空間を作る。空間のストーリー性とは、様々な空間を体験することである (fig.9)。そこで「間」によって空間同士の連続した関係性を認識する。



今の社会では家族の中でも個人のプライバシーを重視して住宅は個別化し、地域のコミュニティも希薄となっている。住宅に「間」を作ることで、内部空間同士や地域との関係性が生まれるのではないだろうか。

6. 二つのストーリーの関係性

二世帯住宅を提案する。今までの二世帯住宅は完全に二つの世帯が分かれている。そこで世帯間に「間」を用いて関係性をつくる。一部お互いが見える所や場合によって共同でも使える場を設けることで、より身近に感じられるようになる。さらに「間」によって自然や地域との関係性も持たせてつながりを生む。

